

但馬牛の雌牛肥育は肥育前期が重要

但馬牛去勢牛では肥育前期のエネルギー摂取量と血中ビタミンAコントロールが産肉性に大きく影響することが分かっている。しかし、雌牛のそれらについては明確にされておらず、県下の雌牛肥育は一部の地域を除いてあまり行われていない。そこで、雌牛肥育の特徴について検討した結果、肥育開始後3カ月間のエネルギー摂取量と早期のビタミンAコントロールが重要であることが分かった。

内容

去勢牛では肥育前期（9-14カ月齢）の1日増体量（DG）を0.7kg以下にすると枝肉成績が良くなることが分かっている。但馬牛雌牛を用いて肥育前期のDGが枝肉成績に及ぼす影響を検討した結果、肥育開始後3カ月間（9-11カ月齢）のDGと脂肪交雑（BMS No.）の間に負の相関が認められ（ $r=-0.53$ ）、DGを0.5kg以下にするとBMS No.が増加することが分かった（図1、表1）。さらに、ロース芯面積が大きくなり、それに伴って歩留基準値が高くなった。

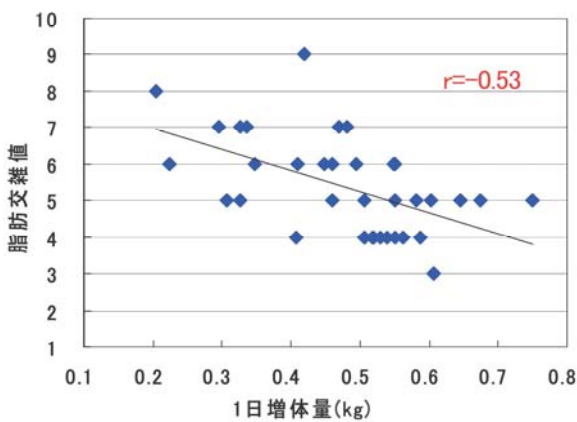


図1 肥育開始3カ月間の1日増体量と脂肪交雑値

表1 肥育開始3カ月間の1日増体量別枝肉成績

項目	1日増体量(kg)			
	≤0.40	0.41-0.50	0.51-0.60	≥0.61
頭数	8	9	15	4
枝肉重量	kg 357.2	352.8	360.4	336.0
ロース芯面積	cm ² 52.5 ^b	49.4 ^{ab}	47.5 ^a	44.8 ^a
バラ厚	cm 7.0	6.7	6.9	6.4
皮下脂肪厚	cm 2.7	2.7	3.0	3.3
歩留基準値*	74.1 ^c	73.5 ^{bc}	73.0 ^{ab}	72.3 ^a
脂肪交雑	No. 6.4 ^b	6.2 ^b	4.5 ^a	4.5 ^a
肉色	No. 3.9	3.9	4.1	4.0

a, b, c: 異符号間に有意差あり(P<0.05)

*: 枝肉からとれる部分肉(精肉)の割合

このことから、雌牛では肥育開始後3カ月間はDGで0.5kgより小さくなるよう去勢牛に比べてより制限し、それ以降14カ月齢までは去勢牛と同様に0.7kg以下とする。

次に、雌牛は去勢牛に比べて飼料中ビタミンA濃度を低下させても血中ビタミンA濃度が低下し難いことが知られているが、その程度は明確にされていない。そこで、同一種雄牛の産子を同一の飼養管理で肥育した去勢牛と雌牛の肥育期間中の血中ビタミンA濃度の推移を検討した。雌牛は去勢牛に比べて血中ビタミンA濃度の減少は緩やかで、肥育中期の目標とするビタミンA濃度（18カ月齢で30-50IU/dl）になるまでには去勢牛に比べておよそ1カ月、遅れた（図2）。このことから、雌牛は去勢牛に比べてβ-カロテン含量の少ない粗飼料への切り替えを1カ月早くする必要がある。

今後の方針

導入時のビタミンA剤の投与量について検討する。

岩本 英治 (家畜部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2427)

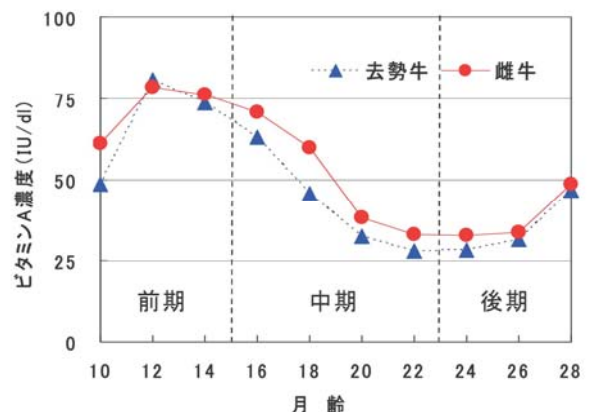


図2 去勢牛と雌牛の血中ビタミンA濃度の推移